



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	討議 : パネルディスカッション
Description	北海道大学入試改革フォーラム2019. 2019年6月18日. 北海道大学学術交流会館(札幌). 北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部主催, 北海道大学アドミッションセンター共催
Issue Date	2019
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86341
Type	other
File Information	5_Discussion.pdf



討 議

－パネルディスカッション－



(司会)

それでは、時間となりましたので、続いて第3部、総括討論、パネルディスカッションにまいりたいと思います。第3部は基調講演と現状報告をしていただきました4名の講師の方々をパネリストとしてお迎えして、先ほど皆さま方からお寄せいただきましたご質問等も適宜紹介させていただきますながら討論を進めてまいりたいと思います。

コーディネーターは北海道大学アドミッションセンターの藤田修副センター長、北海道大学高等教育推進機構の鈴木誠教授のお二方をお願いします。それでは、よろしくをお願いします。

(藤田)

それでは皆さま、よろしくをお願いします。今ご紹介いただきましたアドミッション・センターの藤田でございます。それから当機構の鈴木と2人でコーディネーターを務めさせていただきます。進行方法ですが、今会場からご質問をいただいています。このご質問をそれぞれに該当する方々に答えていただきます。その中でまたディスカッションを続けていくという形で進めていきたいと思っております。

まず、私のほうで今受け取っている質問です。

最初は比較的共通で多かった質問を取り上げさせていただきますと思います。最初のご質問です。これは白井先生と池田先生の両方に共通する質問かと思っております。主体的な学習への取り組みの評価に関するものです。まず白井先生に質問です。粘り強く学習に取り組む態度あるいは自ら学習を調整しようとする態度をそれぞれどのように客観的に測定するのか。できれば具体的な例を教えてください、というご質問です。同じような質問が池田先生にも主体性の評価の中身ということで具体的に教えてくださいというご質問を頂いています。まず、白井先生のほうからお願いします。

(白井)

ありがとうございます。態度のところの評価ですけれども、ここだけを取り出してしまいますと、切り離された本来のコンピテンシー、資質・能力の評価とは違う話になってしまいます。ですから、他の柱、知識・技能の話だったり、思考・判断・表現の話と連動関係を見ていくというのが基本になってくると思います。ですので、あまり勉強ができていないということで知識C、思考、判断Cということであれば、粘り強く取り組むとか学習を調整するというところについても基本的にはそういう前提で見えてもらっていいと思いま

す。ただ、当然今は知識とかが付いていないとしても、学習のやり方が粘り強く取り組んでいて、かつ、自分でやり方を改善しようとしている。自己調整しようとしているということであればこれから上がっていく可能性がありますので、もちろんC、Cだから次もCと決まっているわけではありません。C、Cですけれども、Bとか、極端な場合にはC、C、Aということを経験的に否定するものではありません。

その具体的な見方ですが、これは教科によってかなり特質が違ってくることがありますが、学習の場面をいろいろなところで設定していきます。いろいろな学習の場面を作っていくことがどうしても必要になってくると思います。これはアクティブ・ラーニングの考え方にも通じるのですが、先生が一方的に話しているだけでは評価の機会は得られません。例えば授業の中でグループディスカッションするとか実験課題に取り組むとか、そういう場面を作っていく中で先生が観察したり、あるいは生徒にレポートを出させたりとか、そういう資料を作っていくことが基本になると思います。

(藤田)

ありがとうございます。池田先生にも類似の質問があります。追跡調査の中で主体性のある学生とは、というご説明がありました。ここで言う主体性の中身についてもう少し説明してくださいという質問を頂いています。

(池田)

私の資料では11ページにフロンティア人材、コンピテンスということで、1つのキー・コンピテンスとそれぞれ3つずつコンピテンスを設定しています。主体性自体はこちらの中に文言の形で入っているわけではありませんが、主体性の基になっているのは自分というものになりますので、自分として目標を設定するところが核になってくると思います。その目標を遂行するところに移っていったときに個人で何かできるということが前提にされていますので、3つ目の知識を共有しながらチーム力で達成していくことが求め

られています。主体性といったものはこのコンピテンスの中で言いますと、複数にまたがったものとして捉えていかなければいけないものだと思います。かなり複合的な資質・能力ということで考えています。

(藤田)

先ほど白井先生からご説明いただいて池田先生に質問を頂いたのですが、両先生の主体性という言葉の意味は同じと理解してよろしいでしょうか、という質問もありました。

(白井)

主体性をどの観点で捉えるかによって変わってくるのかもしれませんが。私のほうで申し上げた主体的に学習に取り組むことは学習指導要領に書かれている話です。ですので、各教科それぞれできちんとした記述がありますので、それに基づいた評価ということになります。池田先生からお話が合ったことについては、私が言うのも少し変です。

(池田)

私自身の主体性というものはそれぞれの各部局が提示している3つのポリシーの中から該当するキーワードを拾ってきて整理して、その中から見えてきた主体性というものです。主体性という言葉自体がこの中に見えてきてはいませんが、本学としてはそういう目標設定という個人として何かをやりたい、目標を持つところが核になって、それを実現するために他者とどのように関わっていくのかという自分を生かしつつ他者を生かすという本来の意味での主体性を測っていきたいと考えています。

(藤田)

ありがとうございます。次の質問に進めさせていただきます。これは池田先生、橋村先生に質問です。お名前は匿名とあります。高校教員からの評価にどこまで信ぴょう性、信頼性が得られるか。先生の評価が合否に影響することに先生たちが懐疑的ではないか。日常的な感想・エピソードのエビデンスをどのように取るのかという具体的な質問です。いかがでしょうか。

(橋村)

ありがとうございます。今のご懸念は当然のことです。私が高校教員の立場であれば当然そのようなことは感じます。冒頭に申し上げたようにいろいろな背景の中で評価をいただいています。その評価が非常にクリティカルに働くというものではないということで調査書に近い情報です。調査書情報は5、4、3、2、1で出していただいています。オール5で出すということはないわけです。ですから、その辺りのところは同等の形できちんと出していただけるということです。もちろん十分でない、学校も慣れていないということはあると思います。当然それは勘案しながら評価をします。そこがインタラクティブな関係を進めながら整合性を高めていきたいということです。ご質問自体のご懸念は非常に分かりませんが、「一緒にやりましょう」ということになります。

(池田)

繰り返しになりますが、われわれとしてはこの評価を一回きりで終わらせることなく、この評価をいただいたものを基本的には信頼して入学合格者を出します。そして、その後の追跡調査の中でフィードバックをしていきます。われわれが考えている例えば情報分析力ということはどういうことかという形で、ルールの精緻化を図っていく、あるいは各高等学校の評価、学習活動、課外活動等に即した形でフィードバックしていくという形でお互いに信頼先生を高めていくような仕組みが作っていただければいいと思います。

(藤田)

今のことをもう少し深めた内容になりますが、高校の先生から評価をいただいて、その正当性についての確認ということで一番上のランクの評価はエビデンスを添えていただくという形になってきたかと思っています。ほかの評価も含めてどのように確認していくかということが質問として出ています。基本的にはこれを信頼して、たぶんそのように出たデータと入ってきた学生の追跡調査の関係がその後データとして蓄積していけば精度が上がるといったことだと思います。その辺りはどうな

のでしょうか。

(橋村)

A評価のところは証跡は出てきますが、それが「なるほど」「ごもっとも」という証跡なのかどうかは確認させていただきながらやっています。繰り返しになりますが、先生方の評価を信用しています。

(藤田)

ありがとうございます。

(鈴木)

主体性に対する疑問がたくさん来ていますが、その前に新しい入試改革でいわゆる非認知能力の競争が起こるとお考えですか、という質問が来ています。非認知能力を重視した入試競争が起きるかという質問です。後にしましょうか。

池田先生、スライドNo 3、学生の主体性評価においてパターン1から4の学生の卒業後のパフォーマンス評価に関して何か行われていることはありますか。パターン1や4は最終的にもプラスの学生がやはり卒業後も活躍するという傾向があるのでしょうか。スライドNo 16のコンピテンス・テスト試行版でのコンピテンスはやはり知識の活用や思考力等にもいわゆるコミュニケーションスキルなどコンピテンスに関してはSD法、橋村先生がお話しされた、での高校教員による評価がメインとなるという認識でよろしいのでしょうか、という質問です。

(池田)

まず、スライドNo 3の主体性に関してですが、われわれは卒業後までの追跡調査ができていないこととなります。われわれがこのような追跡調査でフィードバックして行っていることは説明でも申し上げたように、アカデミックサポートのような形で学習成績が落ちたときにリカバーできるような支援体制を整えていきます。

もう一つはやはり入学段階で主体性を維持できるような学生を採っていく必要性ということで今回フロンティア選抜を考えています。

もう一つはスライドNo 16ではなくて12でしょうか。16はコンピテンス・テストになりますけれ

ども。

(鈴木)

コンピテンス・テスト試行版です。知識、活用や思考力の統合など、いわゆるコミュニケーションスキルなどのコンピテンスに関してはSD法のほうがよいのでしょうかという質問です。

(池田)

まず作りやすいところからということで、目標を設定する能力と目標を遂行する能力、そして、一部の意図を伝えるとか意図を理解するというところで試行版テストを作るということです。今後それ以外のコンピテンスについてもこのようなテストを開発していく予定です。

(鈴木)

ありがとうございます。橋村さんと池田さんに質問が来ています。文系学部はなぜ実施しないのですかという質問です。

(橋村)

コンピテンスベースの開発は進めていますが、各学部等、それぞれのお考えがあります。その部分につきましては私がどうこうとは申し上げにくいのが正直なところです。

(池田)

1つは今回コンピテンスベースの評価ということで、どちらかというと、医学系など理系にはなじみやすいとは思いますが、文学部とか教育学部等の学部に関しては、コンピテンスというもので分解してしまったときに失われるものがやはりたくさんあります。そういったものを危惧されているのではないかと思います。本来われわれが目指しているものは多面的と同時に総合的評価も必要だと考えていますので、現在このコンピテンスベースの評価というものはどちらかというと、多面的評価のものであり、総合的評価といったところをもう少し評価していかないとなかなか文系学部のなじみがないというか、コンピテンスに対する疑念みたいなものがあるのではないかなと思います。

(橋村)

文系ということのご質問ですが、ホームページ

にフロンティア入試のフロンティア入試「Type I」「Type II」について掲載されています。そこをご覧くださいいただければと分かりますが、医学部医学科であるとか保健であるとか、いわゆる医療の世界ではコンピテンスが非常に重要であり最終的なものが求められる分野です。「Type I」「Type II」は将来的にもつながっていくことがあるのではないかとはいっていますが、ベーシックにこれが100パーセント浸透していかなければならないものかは今後の問題だと思います。

(藤田)

次の質問に進みます。これは白井先生への質問だと思います。「特定の文脈で」という言葉がありました。そういう定義がある上でキー・コンピテンスは特定の文脈における統合性を見るための課題を基準にして評価されるということですので、文脈が違えば同じコンピテンスを測定しても違うのではないかと。それが本当に転移可能な能力を見ることができるのかというご質問です。いかがでしょうか。

(白井)

コンピテンスは文脈に依存するわけですが、汎用性が高い、要は転移可能なコンピテンスというのは結局さまざまな文脈において使えるコンピテンスということになると思います。非常に局所的なコンピテンスもあると思いますし、そうではない非常に汎用性の高いものもあります。要はキー・コンピテンスをどのように捉えるのかということだと思います。

このキー・コンピテンスはOECDの議論においてはさまざまな文脈で使える誰にとっても重要であるとか社会的に高い価値があるとか、そういう意味でさまざまな文脈で使える汎用性の高いものがキー・コンピテンスであるということだと思います。

(藤田)

逆に言いますと、どういう文脈でも共通であるものがコンピテンスだという理解でいいでしょうか。

(白井)

はい、キー・コンピテンシーということですね。

(藤田)

ありがとうございます。それでは、もう一つ別の質問です。フロンティア入試や北大型コンピテンシー入試とは高校教員が北大だけに合わせるといふことで、生徒全員が北大志望であれば機能しますが、現実はそうではないです。北大は評価の項目を他の大学に合わせる、もしくは国立大学で統一することを進める計画はありますかという質問です。いかがでしょうか。これは池田先生でしょうか。

(池田)

もちろん本学として本学独自に作ったものです。ただ、見ていただければ分かりますが、高校で設定しているようなカリキュラム・マネジメントを設定しているような汎用的な能力を包含したようなものになっているかと思ひます。ただ、少し特殊なものとしてグローバル力に挙げているアイデンティティーの向上とか使命感といったものに関しては本学独自のところがありますが、それ以外のところは学力3要素に準拠したものになっているかと思ひます。そういったこと言ひますと、各高等学校で設定された求める人材とコンピテンスをこれらにひも付けることは可能なのかなと思ひています。

(橋村)

もちろん北大だけではなく、さまざまな大学に生徒が希望しているといふことで、各高等学校がカリキュラム・マネジメントで育成しながら形成的に評価していくことを第一に教育力を上げていただきたいと思ひます。まず、それを十分やっていたくことです。北大のほうから今回のような形で評価軸が提示されてくれれば、そこに落とし込んでいただければいいと思ひます。何も「北大に合わせろ」といふ気は全くありません。まず、ご自分の高等学校が十分な取り組みが進んで評価も含めて成熟した教育活動が行われるといふことをもって、本大学のほうに還元していただければいいと思ひます。

(池田)

他大学でこのようなことを共有していく方法はないのかといふお話ですが、私の資料ですと12ページ目にループリックを示しています。配布された資料では隠れてしまひていますが、科目ごとにそれぞれのループリックを設定しますので、このようなものがきちんと出来上がればほかの大学でも共有できるようなものになると思ひます。

(白井)

先ほどの質問で非認知能力による受験競争のことについて一言だけコメントしたいと思ひます。そもそも非認知能力とは何でしょうかといふことなのです。よく使われていまひすし、確かにいふ名前の本も出ていまひますが、実はOECDの議論の中で非認知能力とは何かといふ話が出ましたが、結局はこの言葉を採用していまひません。採用しない理由はあまりにも曖昧で意味が分からないからです。非認知能力とは元々は認知的能力に対してCognitive skillではないもの。Non-cognitive skill、要は非認知能力ではなくて、認知能力以外の能力みたいなものです。ですから、その内容がよく分からないといふことです。OECDの定義でスキルについては認知的、メタ認知的能力と社会的、情意的能力と、それから身体的・実用的スキルにしています。ですから、このNon cognitiveには運動能力などの身体的スキルとかが当然入ってくるはずですが能力といふ言葉の中には日本で使われてる感じでは身体的能力はどちらかといふとたぶん入ってなくて、情意的なスキルなどが中心だと思ひます。ですから、よく分からないもので考へてしまうと非常に危ない気がしています。これは最初の質問にも関わりますが、主体性と主体的に学習に取り組む態度は重なるのかといふ質問がありました。全然違ひうものだと思ひます。

「主体」といふ言葉は入っていまひますが、主体的に学習に取り組む態度とは学習指導要領の言葉であって、各教科ではかなり狭いところで主体的に学習に取り組まひます。それも教科によって個別に規定しています。要は教科のものなのです。一方で主体性と普通に言ひたときには、その人の正に

汎用的な意味での主体性です。それはたぶん各大学の規定するところでの主体性という意味があると思います。ですので、この認知的スキル以外のところの議論をする際にはそれが何なのかという定義をしっかり押さえておかないといけないと思います。われわれ教育関係者もその定義をしっかり示しておかなければなりません。大学もそうです。そうしなければ高校の先生方もすごく混乱しますので、やはりそこはきちんとやっていかなければならないと思います。以上です。

(鈴木)

ありがとうございます。非認知的能力というのは例のマシュマロ・テスト辺りから広がったような印象があるのですが。

(白井)

有名になったのはヘックマンからだと思います。経済学者のヘックマンが当時あまり成立されていなかった概念として使って結構普及しました。教育面から見ると、少し足りない部分があるように思います。

(鈴木)

三浦先生のご発表の中で汎用的な能力と基礎学力という言葉が使われたと思いますが、その違いを教えていただきたいというコメントが来ています。

(三浦)

基礎学力と言いますと、やはり白井さんの話にもありましたが、学習指導要領の範囲の中で説かれている能力の部分だろうと思います。それが汎用的にということではさまざまな経験とかほかの教科とのつながりだとかがありますから、そういうところから形成されていく部分だろうと思います。ですから、元々違うのではないかと思います。

(鈴木)

AO入試でのコンピテンシー導入ですが、今後一般入試などでの導入は可能でしょうか。可能性としてボーダーなどでの活用など、ご意見を頂きたいということです。

(池田)

現状ではいろいろな議論があります。もちろん

一般入試のほうにも拡大しようという議論ももちろん出てきています。ただ、一般入試に入れたときにどういうメリットがあってデメリットがあるのかを勘案したときに、現在のところ見送るという形にはなっています。ただ、キーとなるのはこの評価の信頼性が今後の追跡調査でどのように評価されるかということと、このような仕組み、あるいはこのコンピテンスペースの評価がほかの大学にも広まるかどうかということにもかかってくるかと思っています。本学だけでこれを一般入試でやろうと思ったら、かなりのリスクを負うということになります。それをどこまで高校教育改革が進み、それをきちんと評価できるだけの大学側の受け皿が整うかということにかかってきているのかなと思います。

(橋村)

池田先生のおっしゃるとおりだと思います。個人的には、やはりこれでもなくてもいいのですが、一定程度アカデミックスキルのみではない多面的な要素が一般入試に入り込んでいくことによって本当に教育が変わっていくと考えています。私が高等学校の教員の時は多面的評価とは何か、AOと推薦の一部で適当にやっているだけでしょう、一般入試には関係ない、だいたい勉強させておけばいいという感じにはやはり思われていました。そこのところを変えていくためには本当に薄いものでも入り込ませていくということをしていかなければ変革は進んでいかないだろうというイメージは持っています。それをどうできるかは分かりません。以上です。

(鈴木)

お2人にもう一つ質問が来ています。主体性やコンピテンシーを重視するには必要な条件に評定平均値の基準は設けられるのでしょうか。また、その理由について教えてください。評定平均の低い生徒でも主体性が優れている場合があります、という質問です。

(池田)

現在のところ、本年度実施の医学部医学科AO入試あるいは水産学部の入試に関しては募集要項

に書いてあるとおりに評定等も鑑みて調査書を評価することになります。調査書の評定平均値は基本的にはわれわれがやろうとしているコンピテンシー評価がもう少し抽象度が高まったものかなと思います。われわれがやろうとしている調査書よりかなり細かくコンピテンスベースで作って見ていくということです。これがうまく信頼性の高いものが出来上がれば調査書に変わっていくようなものであろうと考えています。

(藤田)

それでは次の質問です。白井先生に質問です。評価の客観性についてお伺いしたいということですが。例えばIB以降の評価などはOECDでの議論ではどう捉えているかという興味深い質問です。

(白井)

ありがとうございます。IBの評価は結構先生の専門性を重視した評価をしていると思います。段階評価などで日本と若干違うところもありますし、評価のポイント、タイミングみたいなものをIBでは指定していると思います。OECDの議論ではカリキュラムはこうあるべきとか、評価はこうあるべきみたいな議論はしていません。あくまでも基本的なコンピテンシーの枠組みを示して、それを育成していくためにどのようなことが考えられるかということです。特に具体的にこうやるべきだというのは各国のさまざまな事情がありますので、そこまでは踏み込んでいません。ただ、IBのやり方を見ていますと、結構日本に近いのではないかという感じがします。先ほどのスライドでは意図されたカリキュラム、実施されたカリキュラム、達成されたカリキュラムの3つの段階があるという話をしました。これと比較しますと、各国で要はどこにレギュレーションを強めているのかということでは結構違いがあります。カリキュラムは自由にやってくださいと。各学校単位で作ってもらっても結構です。ただ、その場合評価だけは徹底的にやらせてもらいますという国もありますが、日本は結構逆で、カリキュラムの縛りがあります。ただ、その評価のやり方というのは学校の裁量によりますという感じでどこに力

点を置くのかでたぶん判断が変わってきてしまうと思います。当然、評価のやり方は学校や先生ごとに違いますが、見ていますと、IBと割合似ている感じがします。どこにポイントを置けというような指示をしていますので、そういう意味では日本よりも強めなカリキュラムの介入があり、そんなに大きな違いはないのかと感じています。

(藤田)

ありがとうございます。それでは次は池田先生への質問です。コンピテンス・テストについてブレイクスルーとかアイデンティティーの向上など抽象度の高い要素についての項目がありますが、こういったものはどのようにテストをするのか差し支えなければ具体的な例を教えてくださいというご質問です。具体的というのはなかなか難しいかもしれませんが。

(池田)

そうですね、われわれとしてもこの辺りでグローバル力と書いていますが、国際性の涵養とかフロンティア精神等々に関わる部分として大事なコンピテンスだと思っています。ただ、現在のところ、コンピテンス・テストでどのように評価するかはまだ開発段階といえますか、まだ検討段階でもあります。ここに関してはまだ何も言うことがないです。申し訳ありません。

(藤田)

今の段階ではなかなか難しいというお答えですが、この項目に限らず最高評価を付けた場合に、そのエビデンスを付けることがありましたが、どのようなものが想定されるかというご質問も併せてありますが、いかがでしょうか。

(橋村)

Web上で添付していただくという形を採っています。まず、添付できるものということになります。想定はしていません。とにかく証跡になるものをとにかくお考えいただいて付けていただければと思います。想定といいますか、幾つか例を挙げろと言えば挙げますが、それをもって想定と言われますと困りますので、とにかく評価を付けていただくときにこういうことで付けたのだと

いうことをご自由に出していただければいいと思います。

(鈴木)

私から質問です。池田先生のスライドの2枚目、「追跡調査の結果、主体性のある学生は、たとえ入学時に低くても、卒業時には学業成績が良好であると可能性が高い」とありますが、学生の主体性のあり・なしはどのように調査するのかもう少し詳しくご教授いただけると幸いです。例えば志望動機が明確かどうかということでしょうか、というご質問です。

(池田)

こちらに関しては主に面接で4タイプごとに進めてインタビュー調査をしました。まず一つは、その子の高校の特徴を聞いています。例えば研究とか観察とかを結構やらせて主体的な活動をやっているのか、それとも受験勉強に特化したような高等学校なのか。そういったことを引っ張り出してきています。もう一つは志望動機です。誰から勧められて受験したのかといったことを聞いています。ですので、主体性が高い生徒さんは自分で決めて、どうしてもこの大学のこの学部に行きたいということで先生や保護者の反対を説得して受けてきたところがあります。逆に主体性がないと判断をした学生は、この成績であれば何学部にかかると先生に言われたとか、親がこういう職業なので自分もここに行きなさいという形で受けたという動機付けに裏付けられた子たちは主体性がない動機で入ったと判断しています。それから、入学した後にはかなり高校とは違う勉強をしていくわけですね。難しくなった勉強に関心とか意欲についてインタビュー調査をしています。主体性のある学生はまず分からない、難しいことに対して興味・関心があると答える学生さんであったり、難しいけれども、もう少し補習の機会を増やしてほしいというような積極性・自発性を持っている生徒さんは主体性が高いと判断しています。それに対して主体性が低いと判断した学生さんとはそもそも勉強自体に興味がなかったり、あるいは苦手意識を持っている生徒さんをそう区分していま

す。もう一つは進路意識です。今後大学を卒業した後にはどういった進路を描いているかと。それがかなり明確になっている学生さんは主体性が高いわけですし、なんとなく就職しようとか悩んでしまっただけでどうしたらいいのかわからない生徒さんというのは主体性が低いと判断しました。そのように具体的なインタビュー調査に基づいて主体性のある・なしを判断していきます。

(鈴木)

北大の2人に質問が来ています。高校教員を立てるように見えますが、高校教員へのより一層の負担感と行為によって成立しているシステムだと思っています。

北海道大学を受験する生徒は前期・後期、総合、推薦、さらに〈聞き取り不能〉受験する形になりますが、都度独自のシステムに入学される場合の教員の負担感には果てしないです。共通のポートフォリオ・システムに一度だけ教員が入力し、出願校が各〈聞き取り不能〉に合った項目を抽出、評価する形が望ましいのではないかとご指摘があります。いかがでしょうか。

(池田)

われわれとしてもその負担というところには非常に苦慮しています。証跡を最上位のところだけにするといったところも負担を軽減するという配慮もありますが、やはり本学だけでこれをやっていた場合には、今はAO入試という非常に少ない定員枠のところではありますが、特殊な生徒さんだと思います。そういったところであっても本学ならではの評価をしなければいけないということは非常に負担になると思います。ただ、われわれが考えているものは高校教育改革がカリキュラム・マネジメントとして広まってくればコンピテンシー・ベースの評価が高等学校でも当たり前になってくるかと思っています。その延長としてわれわれのフロンティア人材評価をしていただければ、それは結び付けられるものです。それほど負担が大きくなるということはないと思います。

(橋村)

負担増、労力、コストというような議論は当然出てきます。池田からも申し上げましたが、北海道大学のためだけにこれをやってくださいということではなくて、基本的なビジョンは申し上げてきたと思います。先生方がご自分の学校で教科等のマネジメントをしていくということがまずあって、これがどんどん進んでいく中で負担とか不慣れとかはあるかもしれませんが、基本的にはそういう高校教育の進展を大学のほうに還元していただくコンピテンシー評価だと考えています。現状のものにプラスされるものが負担であるという観点でわれわれは考えているわけではないということです。

(藤田)

ありがとうございます。

(三浦)

ここで高校の教員が言わなければいけないという先生方の視線を感じましたので、一言だけ言います。その負担感というところだけで言いますと、おそらく先生方が危惧されている部分はあるのだろうと思います。北大がこういう入試をされるということになれば、電子上であれ、何か違うことをしなければいけないという危惧はあるだろうと僕も思います。しかし、有意ある若者をどのように大学へ送っていくかは私も進路指導を何年もやって参りました。模擬試験で何点取って、センター試験で何点取って、2次試験で何点を取るからというようなある種一本尺度で受験が進んできたわけですが、しかし、それでも仕組みがうまくいかなかったから、今の高大接続の議論があり大学改革の議論があるわけです。さらに、メタの立場から考えてみますと、別に大学の肩を持つわけではありませんが、やはり高校側の教員としても何かできることがあるのであれば、チャレンジして「一緒にやりませんか？」という橋村先生の言葉が出てくるわけです。おそらく今までの大学ではなかったはずだと思います。「大学もなんとかするから高校の先生、よろしく」ということは私は聞いたことがありません。そういう意味でわれ

われ北海道の高校の先生方が「ちょっとやってみようか」という辺りからやってみるところから始めると、おそらくこのような取組が前に進む一歩になるのではないかと個人的には思います。以上です。

(藤田)

ありがとうございます。おそらく今三浦先生におっしゃっていただいたようなことがそもそものわれわれの高大接続とか、あるいは入試改革のスタートでの問題意識だと思います。ですので、ご負担を高校側にもお掛けすることになるかもしれません。

最終的には育つ学生、若者が将来成長していくためのことかと思います。もう少し質問を頂いています。白井先生に質問です。ご講演の中で最後は時間がなくて少し飛ばしたところがあるようです。そこを聞きたいというご質問がたくさんあります。例えば資料32の授業時間数の推移です。これはどのような話をされる予定でしたかということです。私個人の考えですが、将来授業時間数が減っていくべきではないかと考えていますが、そのような見通しはありますか、というご質問です。まとめてお願いしたいと思います。25番の資料の3つの柱の話です。それから資料16から24における3つのFoundations、KSAV、Agencyの関係を具体的に説明いただきたいということです。それから、Implementedにおける37番の資料について説明を飛ばされたようです。たくさんあって恐縮ですが、ご講演の最後のほうの項目を少し補足いただければありがたいと思います。

(白井)

時間さえあれば喜んで説明します。32と33のスライドになります。やはりカリキュラムを実施していく上で、いいカリキュラムを作っても、そもそも先生方が忙し過ぎれば働き方なども考えなければならぬといった実施段階では難しい問題が出てきます。そういう意味で今のカリキュラムがどうなっているかということで、実は32ページのスライドを見ていただきますと、折れ線グラフは

総授業時数です。これは小中のデータです。実は昔のほうがずっと多かったのです。昭和36年とか昭和43年のカリキュラムのほうがはるかに多かったのですので、今はそれほど時数的には多くないという話が出てくると思います。では、なぜ先生方が忙しいとおっしゃっているのかといいますと、もちろんいろいろな外部的な要因はあるのですが、やはり週休2日制になったところが結構響いていると思います。週休2日制になったのになぜいまだになぜ多いのかとなります。31のスライドになりますが、カリキュラムは文科省が勝手に決めているということでは全くなくて、かなり社会のニーズを踏まえて作っているところがあります。よく振り子現象と言われますが、昭和26年、昔戦後直後ではかなり緩やかなカリキュラムになったものが、これでは駄目だと。子どもたちの周辺にある事柄を雑然と教えているだけだという指摘がありました。それで、高度経済成長期にかけて教育内容を増やしていきましたが、今度は受験競争のための詰め込みだという批判があって減ってきました。一方でゆとり教育が進んでいきますと、学力低下論争、PISAショックが起きて、やはりもっと増やさなければ駄目だとなりました。どんどん振れているわけです。現行の指導要領は結構増やしています。新しい指導要領も結構内容が多いです。ですので、逆に「減らせ」みたいな議論が出ている状況です。国民的な声、特に先生方は直接的なステイクホルダーでいらっやいますので、そういう声をぜひ頂きたいと思っています。

もう一つが資質・能力の3つの柱、25ページのスライドです。これとの関係性です。これも時間があればもう少し説明したところです。OECDのFrameworkが16ページにありますが、3つの柱のようなものがありますが、実はこれが最初からあったわけでありません。最初の議論ではやはり知識とスキルだけでいいのではないかと。ないしはスキルだけでいいのではないかとという議論がありました。どちらかという、アングロサクソンとか北欧系の国では学校とは知識とかスキルを教

えるところであって、態度とか価値観みたいなものは先生の役割ではなくて家庭の役割だということです。それでこのFrameworkに入れることはおかしいのではないかと議論がありました。やはりそこは日本とか韓国とか、中国もそうですが、人間性みたいなものが結構な重要な柱になるだろうとかなり主張しました。

ちょうどフランスでテロが起きていまして、やはりどんなに知識・スキルがあっても、それを変な方向に使ってはいけないということで、最初に3つのドメインが決まりました。偶然にこうなったのではなくて、日本も含めていろいろなアウトプット、インプットがあって結果的に似たようなものになっていることとなります。

それ以外でもCore FoundationsとかTransformative competencies。もう少し上のレベルのコンピテンシーについてはあくまでも個別の知識とかスキルをさまざまな形で組み合わせて活用していく類型を示したものとご理解いただければと思います。以上です。

(鈴木)

私から2つ質問です。1つは名前を申し上げられませんが、一般の方から2枚にわたってワープロ打ちのご質問が来ています。高校の先生の調査書は本当に全面的に信頼していいのか、という記載をされています。調査書の扱いは今回のプレゼンテーションでも出てきましたが、調査書あるいは他面的評価では全国の高校教師の評価方法はまちまちです。高校の部署内においても左右されません。客観性を担保するにはどうすればいいのか、という質問です。北大の2人をお願いします。

(池田)

私の資料では9ページ目の大学入試の将来像というところになります。現在のフロンティア人材評価システムで電子調査書という形になっていくだろうと考えています。このときに、もちろん入試で電子調査書といったものを活用するということをお考えすると、先生方の評価内容の基準にばらつきがあれば元も子もないわけです。それに関し

ては、その後にあります12ページで各評価・活動をきちんとしたルーブリックに設定した上で、どの先生が見ても客観的にこうだというレベル設定をすることが入試で活用するためには大事なことになると思います。

もう1つはこれまでの話にもありましたが、教員による一方的な評価ではなくて、自己評価というものをきちんと入れることが大事だと思っています。こちらではポートフォリオに生徒さんたちの活動あるいは自己評価、他者評価、教員の評価の全てを含めたものを入れてます。大学がこの電子調査書を活用するときに、この生徒さんのこの評価になっているものはどこのポートフォリオ上の具体的な活動あるいは評価に基づいているのかということを中心に検証していくためにこのポートフォリオがデータとして活用できるだろうと思っています。ですので、本当に未来の話ではあるかと思いますが、われわれとしてはルーブリックをきちんと示すことによって、それに基づいて生徒さんを入れていただいて、何回もフィードバックを掛けながらどんどん調査書の精度を上げていく、あるいは入試における公平性を担保するために必要なことだろうと思っています。

(橋村)

ほとんど今、池田さんからお話ししていただきましたが、自己評価の意義をすごく思っています。今のご質問で高等学校から来る調査書は信用できるのかと。さまざまな観点があるだろうということについては高等学校の先生方が一方的に他者評価的に生徒を評価することは駄目ですけれども、当然そこにいろいろな差異が出てきたり環境因子が出てくるわけです。そこに今のルーブリックもそうですが、評価観点の精度を共有しながら自己評価と付き合わせます。「共有」というキーワードがすごく大事になってくる気がします。本人の納得性というものです。それから、当然先生方はいろいろなバイアスが掛かりますよね。よく評価してあげたいと思います。そこで生徒が先生はそう言うてくれますけれども、自分ではそう思わないと言う場合もあります。先生方のバイアスを生

徒が調整してくれる機能もあるのかなと思います。

いろいろな形でなんとかインタラクティブな関係の中で客観性を担保していける形を展望しています。

(三浦)

ここにおられる北海道の高校の先生方はそうではないだろうと思いますが、岡山の話をし少しします。現行の学習指導要領においても、一般の方には知っておいていただきたいのですが、観点別評価をやることになっています。でも、ほとんどやられていません。10年前に現行の学習指導要領を実施するにあたって観点別評価を当時の勤務校で研究・検討しました。つまり観点別評価はこうしようということ半年ぐらいかけて先生方と協議をして観点別評価を実施したのです。いわゆる「規準(のりじゅん)」だとか「基準(もとじゅん)」という言葉の説明から始まって、1つの授業の中で評価するのはこの部分ですと。こういう問いをするから、これだったらA、B、Cというような授業ごとの評価があって、それが単元でくられたときにどういう到達度であるかということでもたまたま評価があって、というところで途中定期テストがあったりして、ということで総合的に評点が付くという仕組みが岡山ではできています。通知表にはそれぞれの評価のA、B、Cができていますから、子どもたちがなぜ自分はこれがCなのかというような表明もできる仕組みがあります。ですけれども、やはりその評価のことに対して公平性がないのではないかという議論はあります。次の学習指導要領もさらにそのことがクリアになりましたから、評価のことに関してもっとクリアになっていくと思います。高校での評価の在り方としてはおそらくもっと検討されなければいけないとも思っています。

調査書というのは一般の方にぜひ知っていただきたいのですが、小中高と要録(学習指導要領)に書かれていることを書式に従って書かれたものが調査書なのです。ですから、調査書だけで勝手に何かが行われているとか改ざんが行われ

ていることはないのです。そういう意味では各学校において学習の到達度であり、どういう状況であったかを表現しています。さらに、新学習指導要領で指導要録には書くところがたくさん出てきましたし、多面的評価を推進する上でeポートフォリオの話が出てきたりしているという状況があるわけです。ですから、高校において生徒と保護者という関係でいろいろな情報が僕はクリアになっていくのではないかと楽観的に思います。以上です。

(藤田)

残りの時間がかなり少なくなってきました。実際に質問はもう少し頂いていまして、取り上げられなかった質問を出した方には申し訳ありませんが、質問はこれで終了させていただきます。

最後に極めて短く1分以内でこの入試への期待とか将来に対する思いを橋村先生から一言ずつ頂ければと思います。

(橋村)

ありがとうございます。いろいろとご指摘いただいたことはまさしくそのとおりだと思います。問題点はあると思いますが、新しいことを進めていくにはいい意味での楽観論を持ちつついかなければならないのかと思いながら仕事をしてきました。

1つだけ誤解されないために言わなければならないかと思っています。池田先生の資料で13番のシートです。ここに評価項目はたくさんありますが、これがコンピテンシー評価そのものではありません。もっと具体的なイメージを持っていただけるような項目を立ててルーブリックが作ってあります。こういうような状況の中での力という具体的なイメージを持っていただけるような形で作っています。それを申し上げたいと思います。よろしくお願いします。以上です。

(池田)

私からはコンピテンスというところで子どもたちの能力・資質といった面を切り分けるとは詳細化していくと今日は説明しましたが、やはりこれだけでは抜け落ちてしまうものがたくさんあると思います。

ですので、大事なことは多面的なコンピテンスベースで見るとということと同時にどのように総合的に漏れがないように見ていくかということも合わせて考えていく必要があると思います。今後ともご指導、ご鞭撻をよろしくお願いします。

(三浦)

あまりお役に立てなかったかもしれないと反省しています。北大の今回の入試改革というのは新しい一面であると思います。昨日も今日もテレビで人口がこうだという話をしていましたが、子どもの数が必ず減ってくる中でどういうふうなわれわれを支えてくれる若者を育てるのかという議論においてはぜひトライをしていただきたい入試だと思います。もちろんそれで大学に入ってから、それぞれの個性を伸ばしていただいて社会に送り出すような仕組みを大学のほうでよろしくお願いしますと思います。以上です。

(白井)

今日は北大の大学入試の話でしたが、調査書の議論はたぶん中学校でも結構きっちりやっているといます。それこそ手を挙げて1ポイント、忘れ物をしたらマイナスというような。それは高校入試の話ですよ。やはり今は大学入試は変わろうとしています。高校入試が全国的にはすごく遅れています。AIの時代に人間がどこまで役割を果たせるかは非常に大きなポイントになっていると思います。やはり人間がやることには常にミスがあったり、あるいは公正性が失われるようなこともあるかもしれません。それを排除しようとする、結局手を挙げて1ポイントというような見掛けの超表面的な入試になってしまいます。ですので、公正性はもちろん大事ですが、その公平性はどういう意味で捉えるのかということについてももう一回考え直す必要があると思います。

(藤田)

ありがとうございます。それでは、時間ですので、このパネルディスカッションを終了させていただきます。バネラーの先生方、改めて、ありがとうございます。